

「全世界に関わる言葉」—使徒行伝講解説教 48—

使徒行伝 26章24節～32節  
ヨハネの黙示録 1章 9節～20節

説 教 本庄侑子牧師

世界中で新型コロナウイルス感染症への対策がなされる中、大阪教会においては、3月1日と8日の聖日は、聖堂に集まらず、それぞれの場所にあつて礼拝を守ることに致しました。胸裂かれるような痛みを伴う決断でした。代々の教会は、戦時下でも、集まって礼拝を捧げてきました。祈る中で、ヨハネの黙示録に記された御言葉が示されました。

ヨハネは信仰のゆえにパトモス島に流され、独り礼拝を守っていました。「わたしは、主の日に御霊に感じた。そして、わたしのうしろの方で、ラッパのような大きな声がするのを聞いた。」(10節)「そこでわたしは、わたしに呼びかけたその声を見ようとしてふりむいた。ふりむくと、七つの金の燭台が目についた。それらの燭台の間に、足までたれた上着を着、胸に金の帯をしめている人の子のような者がいた。」(12～13節)

「人の子」とは、ダニエル書において「まことの王」を指す言葉です。「足までたれた上着」「金の帯」は祭司の服装であり、「声は大水のとどろきのよう」(15節)「口からは、鋭いもろ刃のつるぎ」(16節)は預言者を象徴しています。つまり、声の主は、王・祭司・預言者が一つとなったイエス・キリストであり、後ろから声がしたということは、ヨハネが声を聞く前から、主は既にそこにおられたということでしょう。

振り向いたヨハネがまず見たのは、「七つの金の燭台」でした。「七つの燭台は七つの教会である。」(20節)「それらの燭台の間に」(12節)の「間に」は「真ん中に」とも訳せる言葉です。独りで礼拝していると思っていたのに、教会と共におり、ずっと前から、復活の主が教会の真ん中に立っておられたのです。

「恐れるな。」恐怖のあまり、気を失ってその足もとに倒れたヨハネに、主はこう語りかけられました。「わたしは初めであり、終りであり、また、生きています。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きています。そして、死と黄泉とのかぎを持っている。」(17～18節)

主は二度も、わたしは「生きています」だとおっしゃいました。世にあるどんな罪の力、死の力にも、主は打ち勝って、墓を空にしてよみがえってくださいました。今も生きておられ、終わりの日にご自身の救いのわざを完成させる

ためにその力を発揮しておられます。

ヨハネが見た復活の主の右手には、七つの星がありました。「七つの星は七つの教会の御使」(20節)、御使とは、神の御心を行う部隊、右手は神の力を握っている手です。教会において、主は御心を行うために力を奮っておられ、私たちはその中に置かれ、用いられているのです。

私たちは今朝、このお方から「恐れるな。」という言葉聞いています。使徒行伝26章において、パウロはこう語っています。「フェスト閣下よ、わたしは気が狂ってはいません。わたしは、まじめな真実の言葉を語っているだけです。王はこれらのことをよく知っておられるので、王に対しても、率直に申し上げているのです。それは、片すみで行われたのではないのですから、一つとして、王が見のがされたことはないと思ひます。」(26節)

私たちの人生も、主の御手の中に置かれ、やがて完成されます。かつて、ヨハネに示され、書き記されて伝えられ、パウロも耳にし、信じ、宣べ伝え続けた言葉は、「まじめな真実の言葉」であり、世界の「片すみで行われたのではない」、全世界に関わる言葉です。

「この福音のために、わたしは悪者のように苦しめられ、ついに鎖につながれるに至った。しかし、神の言はつながれていない。」(テモテへの第二の手紙 2章9節)私たちは今、望んでいない状況にあつたとしても恐れることはないのです。御言葉は閉じ込められていないからです。

ある姉妹が、こんなことをおっしゃいました。「礼拝のために集まれない。こんなことは初めてで本当に辛く、寂しい。でも、それぞれが、灰をかぶって静かに祈る受難節を過ごして、普段から礼拝に集いたくても集えない方々のお気持ちを自分ごととして覚える時となりますね。次に礼拝に集う日、讃美の声がとんでもないことになるでしょうね。楽しみですね。」

主よ、世の何ものも閉じ込めることができない御言葉の力で、私たちの心を治め、平安を満ち、あなたの教会として立たせてください。今週も、あなたの福音が前進しますように。私たちを御心のままに用いてください。

(記 説教要約奉仕者)